

飛田穂洲の野球信念と物語の生成

高橋 豪 仁

奈良教育大学保健体育講座 (体育学)

(平成14年4月30日受理)

Baseball Faith of Tobita Suisyu and Generation of the Narratives

TAKAHASHI Hidesato

(Department of Physical Education, Nara University of Education, Nara 630-8528, Japan)

(Received April 30, 2002)

Abstract

How have the narratives about high-school baseball been generated? It is assumed that Tobita Suisyu (1886-1986) is an important person to answer the question because of his career. He was famous for his "Senbon Nokku" when he was the first coach of the baseball club of Waseda University, and he had been writing about student baseball for 40 years as a journalist. That is why he has been called the Father of Student Baseball.

The purpose of this study is to clarify his principles about baseball by studying the contents of his selected masterpieces. As a result we found the following principles of his baseball philosophy: vengeance, unselfishness, moral cultivation, hard training based on the code of the samurai, amateurism, communal spirit, Yakyu-dou as religious belief, spirit of fortitude and manliness, frugal life, carelessness about appearance and so on.

When we classify the media of sport by the scale of hotness and coolness, the hottest media are printing ones and the coolest media are sport events that are the actual sport plays in stadiums. TVs and radios are located midway between them. According to this scheme, it can be said that Tobita's narratives had been spread through the hot media such as newspapers and magazines. Though all of his narratives do not exist as ideology of the student of baseball, some of them are still alive nowadays. Some narratives are deposited in people's mind, and those narratives are reinforced when people see the "events" based on the existing narratives in their mind. It may be suggested that the narratives of sport are generated through circulation between "narratives" and "events."

Key Words: Tobita Suisyu, Baseball, Narrative

キーワード: 飛田穂洲, 野球, 物語

1. はじめに — 物語としてのスポーツ

1992年8月16日, 夏の甲子園大会 (全国高校野球選手権大会) 7日目, 星陵 (石川) - 明德義塾 (高知) の試合で, 大会随一の強打者である星陵松井選手 (現在, 読売) に対して, 明德義塾は5打席とも敬遠の作戦をとり,

2対3で勝利した。1回, 3回, 5回は走者がいたが, 2アウト無走者の7回も敬遠した。1点を追う9回表の星陵の攻撃, 2アウト3塁で松井選手が5度目の打席に立つと, スタンドから「勝負, 勝負」の大合唱が起こった。敬遠後, 星陵の3塁側アルプススタンドや外野席からメガホンや紙コップがグラウンドに大量に投げ込まれ, 試合が

一時中断した。そして、明德義塾の校旗掲揚の際には、整列した明徳の選手に対してスタンドから「帰れ、帰れ」の声が沸き起こった。牧野直隆・日本高等学校野球連盟会長は、試合後に記者会見し、「勝つことに走りすぎている。全打席敬遠は度を超している。走者がいる時、作戦として敬遠することはあるが、無走者の時には、正面から勝負して欲しかった。」と述べた⁽¹⁾。

アニメーション映画「タッチ3」には、こんな場面がある⁽²⁾。場面は甲子園への出場権をかけた地方予選の決勝戦、甲子園のヒーロー新田を擁する須見工 vs. 明青学園。延長10回の表に、このドラマの主人公である上杉のタイムリーヒットで、明青学園は1点を勝ち越す。そして10回の裏、この回を押さえれば明青は甲子園に行くことができる。2アウト、ランナー2塁で4番の新田を迎える。新田は前の打席でホームランを打っている。明青ナインはマウンドに集まる。上杉（ピッチャー）は「ここは敬遠だろうな。1塁も空いていることだし。次の打者は料理しやすい大熊。誰から取ってもアウトは1つだろ。よしいくぞ大熊勝負、文句無し」と言い、明青ナインは守備につく。ところが、キャッチャーの松平は立ち上がると「ショート、サードに寄れ。外野、バック。あと一人、締まっていこうぜ」と指示を出し、勝負させる。上杉は「一人くらい頭のいい奴がいてもよさそうなのに」と呟く。上杉は全力投球し、新田はヒット性のファールを打ち続ける。上杉は「今から敬遠したくても、次の打者に投げる力は残っていねえ。南（ヒロインの名）、ゴメンな」と言い、投球動作に入る。画面はスローモーションとなり、ゆっくりとボールはキャッチャーミットに入る。「ストライク、バッターアウト」試合終了。

前者の松井選手の連続5フォアボールは実際の出来事であり、一方、後者の野球アニメ「タッチ」はフィクションである。確かに、こうした違いはあるのだが、松井選手への連続フォアボールを見た観客のそれに対する否定的な態度や、「タッチ」の読み手の期待を意識して、その作者が提示したプロットには、共通する何かがある基底にあるのではないだろうか。すなわち、それは、「たとえ負ける確立が高くなっても、敬遠しないで堂々と戦うことが重要なのである」というメッセージであり、アニメであろうが実際のゲームであろうが、それを見る者（ゲームをする者も含む）は、そのメッセージを違和感なく受け入れるメタ・コードを既に持っているのではないだろうか。スポーツにおいて、競争性は不可欠な要素である（樋口、1987:28）。しかしながら、人々はスポーツにおいて勝利を追求することを当然視しつつも、一方で、それを越える物語（ナラティブ）を求めているのかもしれない。

では、こうした高校野球にまつわる物語は、如何にして生成されるのだろうか。『甲子園野球のアルケオロ

ジー』を著した清水は、早稲田大学野球部初代部長であった安部磯雄の感化を受けた卒業生が新聞社に入社し、さまざまな記事を書くことによって、その「物語」が強化されたことを指摘している（清水、1998：pp.239-245）。早稲田大学野球部の選手だった者で、特に甲子園野球について多くの記事を書いているのは、学生野球の父⁽³⁾と呼ばれた飛田穂洲である。そこで本稿では、野球にまつわる物語の生成に関する基礎的な研究として、飛田穂洲の人物像や彼の野球信念を、彼の著作⁽⁴⁾等から検討することを目的とする。そして、このようなスポーツにまつわる物語が、メディアとしてどのようにして再生産されるのかを考えてみたい。

2. 飛田穂洲の年譜⁽⁵⁾

【明治15~22年頃：群雄割拠時代】

1886（明治19）年12月1日 茨城県東茨城郡大場村（現在同郡常澄村大場）に、8人兄弟姉妹、姉2人兄1人の4番目として生まれる。本名は忠順（ただより）。父（憲明院）は大場村の初代村長だった。

「地主であったが、それでも一時多額納税者でもあった。…私の少年時代は恵まれすぎていたくらい、なにに不自由なく育った。」（飛田、1986a：p.9）

【明治23~36年頃：一高時代】

1893（明治26）年4月 尋常小学校入学

1896（明治29）年 三ヶ村組合の常澄高等小学校1年

「三角ベースの野球の興味にすっかり魅せられてしまった」（飛田、1986a：p.30）3年生の時、大洗高等小学校に転校し、本式の野球を習った。水戸の小学校や那珂湊小学校と試合をした。キャッチャーミットが普及し、捕手のデレクト・キャッチが始まっていた頃である。

「憲明院（父）があたかも不倶戴天の怨敵のように野球を嫌ったのはやはり夷狄のわざという思想的ものから来たのでは」（飛田、1986a：p.33）

1902（明治35）年 水戸中学（現在水戸一高）に入学する。明治36年春より選手、38年主将となる。投手、三塁手として活躍し、38年の東京遠征では、慶応普通部、学習院中等部に勝利する。（飛田、1986c：pp.249~）

【明治37年以降：早慶時代】明治39年11月3日の試合を最後に早慶戦中止となる。

1907（明治40）年 早稲田大学入学後、4月に脚気になり水戸に帰り静養する。父に上京を反対され、安部先生に手紙を書き尽力を仰ぐ。安部先生に原稿の斡旋をしてもらい、苦学生として9月に上京する。（飛田、1986a：pp.93~）

1909（明治42）年10月26日 野球部主将となる。

- 1910 (明治43) 年 6月22日 ハワイ遠征の為に帆出する。
約2カ月間試合し、13勝13敗の成績だった。
来日したシカゴ大学に連敗した責任を理由に、選手
を引退してコーチとなる。(飛田, 1986a: pp.416~)
- 1911 (明治44) 年 報知新聞の運動記事を依頼され、運
動のある度に出社して記事を書いた。毎月10円の原
稿料。(飛田, 1986a: p.187)
- 1913 (大正2) 年 早稲田大学法学部卒業
- 1914 (大正3) 年 押川春浪 (冒険小説家) が主宰して
いた月刊誌『武俠世界』編集部員
- 1915 (大正3) 年 2月 許婚 土織田ひろ子と結婚する。
後に、忠広、忠英の2児が誕生する。
- 1918 (大正7) 年 読売新聞社へ入社する。
- 1919 (大正8) 年12月 早稲田大学初代監督に就任する。
専任コーチの手当は、月50円で、月給が2/3になっ
た(飛田, 1986b: p.266) (飛田, 1986c: p.127)。
- 1921 (大正10) 年 アメリカに遠征する。
- 1925 (大正14) 年 慶応大学との対校戦復活に尽力し、
秋、19年ぶりに復活し、2勝1敗とする(飛田,
1986d: pp.199~)。11月、来日したシカゴ大学に2
勝1敗2引き分けで勝ち、これを機に早稲田大学野
球部監督を辞任する。
- 1926 (大正15) 年 朝日新聞社嘱託記者となる。以来約
40年間、甲子園の中等野球 (現高校野球) や 東京6
大学野球のネット裏から健筆をふるう。趣味は鴨猟
(飛田, 1986e: pp.305~)。
- 1945 (昭和20) 年 5月 空襲のため、東京から水戸の大
場に引き挙げる。ここに永住することにし、翌年1
月に家を建て、本家の母屋から引き移る。昭和22年
から30年頃まで夫婦で農作業もした。
- 1946 (昭和21) 年 大場村の公選第一回の村長 (2年間)
となる。
- 1957 (昭和32) 年 紫綬褒章を受賞する。
- 1958 (昭和33) 年 学生野球への功勞により朝日文化賞
を受賞する。
- 1959 (昭和34) 年 2月21日 妻ひろ子を失う。
- 1959 (昭和34) 年 東京・後樂園にある野球体育博物館
理事となる。
- 1961 (昭和36) 年 野球体育博物館 (野球殿堂) 入りす
る。
- 1965 (昭和40) 年 1月26日 常澄村大場の自宅で、心筋
梗塞のため死去、78歳であった。
- 1966 (昭和41) 年 東京・戸塚の早稲田安部球場に、胸
像 (菊池一雄作) 建立される。
- 1967 (昭和42) 年 水戸一高校庭に胸像 (菊池一雄作)
建立される。
- 1986 (昭和61) 年 生誕百年を記念して、「飛田穂洲楯」
が創設され、各回の春の高校野球茨城県大会の優勝

校に贈られることになった。楯には、飛田の揮毫の
「一球入魂 快打洗心」という文字が浮き彫りにさ
れている。

3. 飛田穂洲の野球信念

この節では、飛田の著作や彼について他の人が書いた
ものから、飛田の野球信念や彼の人となりを表す逸話を
提示する。

3. 1. 敵討ち (復讐) 主義

飛田は中学で野球を始めた動機を以下のように述べて
いる。「水戸中学において選手になろうとの決心を堅く
したのは、水中最初の敗戦、対下妻中学戦に非常な衝撃
を受け、選手になって下妻に復讐するという、その念願
にほかならなかった。」(飛田, 1986a: p.35) しかし、下
妻中学に挑戦しても応じてくれなかった。そこで、「や
むなく無念の日を送るうち、下妻軍が修学旅行の途東京
において郁文館と戦い敗戦したとの報を得、さてこそ郁
文館を撃破して間接的に下妻へのうっぶんを晴らさんと
したのである。」(飛田, 1986a: p.37)

明治36年、東京に遠征して郁文館を破った。そしてそ
の翌日、慶応普通部と試合をして、「十五対〇、水中有
史以来の大敗、どの面さげて水戸へ帰れる。…私どもは
東京で青坊主になった。そして白昼帰るのを恥じて薄暮
を待ち裏門からコッソリ帰校したのであった」(飛田,
1986a: pp.43-44) 帰りの汽車の中で、先輩に慶応に勝っ
てくれと頼まれる。そして明治38年、飛田は水戸中学の
主将となり、上京して慶応普通部と試合し勝利を得た。

明治43年、当時早稲田大学野球部主将であった飛田
は、来日したシカゴ大学に連敗した責任をとって選手を
辞退した。大正8年に早稲田大学野球部監督の話が来
た。当時読売新聞社で社会部の記者をしており、すでに
子どもが2人いた。「余が早大野球部コーチとして立っ
たのには…シカゴ大学野球部に対する復讐の一念にあっ
たことは否めない。…大正8年の暮れに選ばれてコー
チたる時、余は既に三十余歳であったが、少年の心に
帰ってその選にあずかったことを天に喜び地に喜んだ。
…シカゴに復讐する機会の到来、それが余の心の欣喜で
なくてなんであろう。野球界に再生した余は、一路シカ
ゴへの復讐の旅に勇ましくも船出したのであった。」と、
飛田は野球部コーチの就任について書いている(『野球・
人・漫筆』飛田, 1986e: pp.223-224)。

大正14年11月9日、1勝1敗2引き分けで迎えたシカ
ゴ大学との最終戦4対0から逆転勝利した。「穂洲は夢
心地でわが家に帰った。抱きついてくる忠広、忠英の二
児を抱いて、ホロホロと涙が落ちた。その夜、心ひそか
に引退を決した。もう自分のなすべき仕事は終わった。」
(『熱球三十年』2: p.308) この勝利を機に、飛田はコー

チを辞し、東京朝日新聞の記者となった。

このように、水戸中学時代のエピソード、そして、早稲田大学の主将として味わった屈辱をコーチとして雪辱するという敵討ち主義の背景には、強固な勝利至上主義的信条（日下、1985）があったと思われる。

3. 2. 師である安部磯雄との関係

安部磯雄は早稲田教授であり、初代の野球部部長として飛田が選手そしてコーチであった時、多大な影響を飛田に与えた。後に安部は衆議院議員となった。

「明治四十年春3月笈を負うて上京した穂洲は、…。私はその日から安部門下生の一人として三十有余年先生の陶冶と、恩恵と、慈愛の中に過ごしてきた。私にとってはいわば第二の父ともいえるべく、私の野球精神を造り挙げてくれたのは、まさしくこの安部先生と球界の巨人ともいべき押川清（飛田、1986a：pp.230～）先輩であった。安部磯雄先生からうけた私の感化というものは広大無辺である…。」（『野球道』飛田、1986c：p.181）と、飛田が述べているように、安部は飛田に大きな影響を与えた。また、穂洲が渡米で留守中、息子がハシカに罹ったとき安部夫人が見舞ったり、安部は穂洲の誕生日には毎年一家を招いて焼き焼を御馳走したり、家族で軽井沢の野球部合宿に行ったりし、家族ぐるみの親交があった。

飛田は安部の教訓について次のように述べている。

「…品行の方正であるべきことは、それが全校の代表選手として注目されるだけいっそう自省されねばならない。…品性優秀にして人の範とするにたるということは選手の第一条件といってよい。さように先生は品性問題に重きをおかれたから、選手も常にこの点は大々的に注意し、もし事件でもひき起こした者があれば、容赦なく除名された。…野球部の生活で最も重要な心がけは、他人に迷惑をかけぬということである。」（『野球道』飛田、1986c：pp.196-197）

また、飛田は自身が強調する武士道とは、紳士道であり、スポーツマンシップであり、そしてそれは無私道につながるのだと述べている。「日本の武士道は単に武人の為のみにみつけられたのではない。これを砕いていえば、紳士道であり、スポーツマンシップということになるのではなかろうか。…男の身だしなみ、それがいわゆる武士道であり、私はこれを無私道として日本人の心の中に永久の生命をもたせたいと思う。恩師安部先生は無私道の権化であり…」（『野球道』飛田、1986c：pp.244-245）

飛田自身、安部を師と仰ぎ、安部によって感化されたと書いているが、安部との性格の違いを示すこのようなエピソードもある。大正10年のアメリカ遠征、5月10日の第1回のシカゴ大学戦に4対2で惜敗した。11日から16日までの間に4試合を中西部各大学と行い、18日のシ

カゴ大学との第2回戦、エース谷口五郎がマウンドに立ったが、谷口の疲労は極度に達し、6回までで4対2とリードされていた。「谷口はベンチに帰るたび、私に苦痛を訴えるのであった…。第7回にいたって谷口はベンチから動かない。『もう、とても投げられません。勘弁してください』『だれも代わるものがないのだから、我慢して投げてくれ』『とてもだめなんです』…私の血はすでに逆上していた。『やれ、肩が抜けても本望じゃないか。君は本当の早稲田野球部精神というものをまだ知っていない。死ぬまでやるのが早稲田の選手なんだ。アメリカへ何しに来たのだ。今日すぐ日本へ帰っちゃえ』…谷口は…頭を上げて立ち上がった。その目には涙が光っていた。『やるか』『やります。きっと』こう言いすてて一歩二歩プレートの方に五郎が歩き出したせつな、『飛田君！』厳然たる声が私の後方に起こった。安部先生である。『投げられぬという者を無理やり投げさせようという法がありますか』『でも』『でも、ではありません。他の人を投手にしろ』『ハッ』鶴の一声…。議論の余地もない。先生の一言は絶対だ。」（『熱球三十年』飛田、1986b：pp.59-62）飛田穂洲の方が恩師安部磯雄よりも自虐的な野球信念が強かったのかもしれない。

3. 3. 質素剛健

飛田は学校によって選手気質が異なり、慶応や学習院の部風にはどこか自由なところがあり、学生の髪型も洒落ていたが、一方、早稲田や一高の部風には堅苦しさがあり、髪型もいがぐり坊主であると述べている。（飛田、1986c：pp.152-154）飛田の著作には、硬派や蛮カラを謳歌している箇所を散見することができる。

「昔の書生はおでん屋かそば屋がせきの山で、豚肉や馬肉を御馳走であり、…。いまでも質素剛健を旨とする学生もあるに相違ないが、早稲田通りなどで服装上我意を得るもの百に一つはない。多くは軟派の服装をして得意になっている」（『野球生活の思い出』飛田、1986a：p.74）「そのころの選手は、…みんな地味な風をしていて、かすりの羽織に観世よりのひもを結んで、小倉のはかま、書生らしくキチンとしていた。」（飛田、1986b：p.237）「（明治から大正初期に現れた選手は）決して野球選手たる清浄さを失わなかった。…質素剛健で身をあやまらぬ、心を汚さぬという信念を固く持っていた。これが彼らには一種の宗教であった。…昔の粗野な服装が華麗なユニフォームに進化してきた現在では、皮のオーバーを着る時代…猿回しのような色とりどりのを着用して得意満面…。…各チームの監督などが、いたずらに選手のきげんを損ねぬため、オシャレ選手の申し出を寛容することは、日本の野球道をあやまるものといわなければならない。」（『現役選手へのいましめ』飛田、1986b：p.25）このほか服装については、長髪にすることや、ズボンを下ろしてストッキングを見せないことも戒めてい

る。(飛田, 1986c : pp.347-348, 昭和33年著)

早大監督時代、渡米に際して選手も背広で行くことになったが、富長徳義という学生は「『アメリカへ洋服を見せに行くのではない、野球をしに行くのだから、おとうさんの古洋服で結構や』と言ってきかない」というエピソードを紹介している。(飛田, 1986b : pp.45-49)

「野球精神宣伝の第一義には青少年の心に剛健なる気象を打ち込むということが多分に含まれていなければならぬ。男は軟弱ではいけない」(「男は男らしく」飛田, 1986e : pp.233-234) ここで引用したように、飛田は、質素剛健を重んじ、軟派でなく硬派を、ハイカラではなく蛮カラに好感を持っていたようだ。

3. 4. スポーツとは

ここでは、飛田がスポーツと体の健康、またスポーツと教育についてどのように考えていたかを紹介する。

飛田が早稲田大学の学生の時にコーチとして派遣された中学校の卒業生と十数年ぶり再開した時の会話である。「(飛田)『そんなに生きておられればいいが』『運動家が長生きをしなければ、恥辱ですよ』(飛田)『いや、スポーツは不老長寿の術ではないさ。スポーツにはほかに効能があるのだから、長命の一助などということは問題ではない』」(『熱球三十年』飛田, 1986b : p.84)

「保健長生や体位向上も、スポーツに付随した一条件たることはなんら差しつかえはないけれども、スポーツには他に重要な真使命のあることを忘れてはならない。すなわち精神の鍛練である。スポーツからこの精神鍛練を取り去れば、きわめて空虚な存在となり、スポーツの尊厳ははなはだしく阻害されるであろう。」(『野球清談』飛田, 1986c : p.48)

「もし遊楽的に見られるものがありとすれば、それはスポーツの範囲内におかれるものではない。われらは精神教育のないものを、スポーツとはいわないのである。」(飛田, 1986c : p.101)

飛田にとって、スポーツとは健康や体位向上に役立つものであるかもしれないが、それよりも精神の鍛練、人格の形成に資するものである。もしも精神修養に結びつかず、享乐的に行われるのであれば、それはスポーツの範疇には入らないと飛田は考えていた。

3. 5. 地力主義

飛田は、地力、すなわち実力を養うためには、何よりも練習が命であると言う。

「地力を養わねばなぬ。それが私のコーチの根本である。頭脳よりわき出るかけ引き、作戦、それは地力をつくり上げてからで遅くはない。奇手を用いるまえに、堂々と四つ相撲をとって勝ちたい、うけて立つ大相撲をとってみたいというのが念願であった。」(『熱球三十年』飛田, 1986b : p.299)

「地力をつくる資本は、練習より他に求むるなにもな

い。一にも練習、二にも練習、三にも練習、…永久不滅たるべきこの金言は、すでにわが旧一高の選手によって如実に示されている。一高の野球精神というものは、これによってつくられ、一高から一高式の練習をとり去ったら尊敬に値するものはない。」(飛田, 1986b : p.301)

「吐血奮闘というのが野球の真の練習はまさにこれである。…打たれた球を追うて走る。捕れない。また打たれる。走る。捕れない。それを息の続くかぎり幾度となく続ける、やがて目はくらみ、足は乱れ、ついに地上につかれて動けない。しかもその日の練習に捕り得なければ、また翌日この練習をしなければならぬ。」(『練習常善』飛田, 1986c : p.221)

「練習常善とは不断の練習を続けるという意味であり、常にたゆまぬ努力をおしむなということである」(飛田, 1986c : p.230) 「…どこにでも練習場があるということである。極端にいうと、座っていても、立っていても、歩いていても練習のできる方法を案出することである。わずかの空き地があればバットの素振り練習ができる。バットを握る余地がなければ腕をバットにかえてバッティングの練習ができる。まぼろしのボールを握ってピッチングの練習ができよう。(『学生野球にシーズン・オフはない』飛田, 1986c : pp.311-312)

3. 6. 千本ノック

飛田は早稲田大学野球部のコーチを務めた大正8年から14年まで、選手たちを猛練習で鍛え、早大の黄金時代を築いた。「千本ノック」の生みの親と言われ、厳しい練習を課したと言われる⁽⁶⁾。

「…練習見物人から非難されるほど猛烈なノックを打った…。ベースボールを楽しむのだ、野球を苦しむためにやるのではないなどと、寝言をいう選手に名人上手ができ上がるはずがない。野球選手は苦しんでこそ、その選手生活に意義を生じ、精神の修養も完成される。シミタレたへたくそな野球なら、やらぬほうがましである。」(『熱球三十年』飛田, 1986b : p.249) 「…根本行都は、私から酷烈なノック洗礼を受けて、あるときは半死半生になった。連続ノックを三十三分にわたって打たれたときなど、口から泡を吹いてちっとも動けなくなった。」(飛田, 1986b : p.260)

東京大学野球部OBの坪井氏は以下のように述べている。「(飛田) 翁は一高に行われた武士道野球というものは、確かに日本の野球の基礎になったとし、更に武士道観を、人間道を指すもので、これは地球上で呼吸している人間のすべてに通用する道徳的観念と心得る、と述べている。そして一種の、一高に対する心酔者と、自らを語られる。過言ではあるが、飛田翁の精神的素養には、生誕地の土地柄から旧水戸藩の土風の伝承もあったと思われ、そこに古武士の風格を見る思いがする。(坪井忠郎「一高の武士道野球に心酔した飛田さん」飛田,

1986f : p.49)

飛田の千本ノックに代表される猛練習は、一高の練習を範とするところに依るものであり、それは武士道的な鍛錬主義と呼ぶことができる⁽⁷⁾。一高の野球には、勝たなくては恥という武士道的勝利至上主義と、精神の修養に役立たなくてはならないという武士道的鍛錬主義の2つの中心的信条が存在していた(菊, 1993 : pp.88-93)。

3. 7. 宗教的信条としての野球道

飛田の早大監督時代、大正11年4月17日、自由打撃練習中、レフトを守備していた学生が死亡した。この事に関して、飛田は次のように書いている。「運動を迫害せんとするもの、野球を毛虫のごとく嫌うものは、木村君の死によって自説の援助を得たように喜ぶかもしれぬ、…ののしる者はののしれ、あざける者はあざけれ、私の野球に対する信念はいかなる迫害が山と横たわるとも動じない。野球の没落がくるとき、すなわち飛田穂洲の死が意味される。狂と呼び、痴と呼ぶも他評に任ず。僕もまた野球に殉教するの覚悟を有す。」(『野球・人・漫筆』飛田, 1986e : pp.281-283)

学生の死という状況にあって、このような叙述をすることから、飛田の野球に対するコミットメントが著しいことが分かる。おそらく、飛田にとっての野球は、単なるスポーツではなく、疑似宗教的なものとなっているのかもしれない(高橋, 1989)。また、飛田は以下のように、野球を宗教や信仰に譬えて書いている。

「さらに大事なことは運動を宗教化して殉教の心がけでまい進しなくてはならない。」(『野球・人・漫筆』飛田, 1986e : p.226) 「…いかに修養の野球の厳酷であるかが窺われるであろう。これをもって吾々はしばしば野球宗という文字を使い、…」(『野球読本』飛田, 1986d : p.14) 「戦争中、吾々の野球や庭球は、甚だしい弾圧をうけた。…しかし理非曲直を問題とせず、浅慮な感情から、排撃した軍人の一部も、是れに已むなく便乗した悪代官に等しい役人の一部も、ついに吾々の信仰を奪うことは出来なかった。我々の信仰たる日本の野球は、実に現存したのである。」(「進め！野球の大道へ！」飛田, 1986e : pp.334-335)

3. 8. 一球入魂・一球洗心・一打入魂

ノンフィクションの小説に、「魂を投げろ」がある。主人公の敬吉は貧しい家庭の子どもで、運動能力は優れているが、学校から帰ると覬取りの為に野球の練習に満足に参加することができなかった。御殿山との試合は、敬吉の失策の為に負けてしまった。翌年、天野監督は「敬吉君、これはタマを投げるのではない。君のタマシイを投げるのですよ」と、朝の練習が終わるたびに敬吉に言った。御殿山との試合前、「敬吉君、君、魂を投げることを忘れてはいけないよ、それさえ忘れなければ、君のタマを御殿山は一つとしてヒットすることができな

い」と敬吉に対する注意をただ1つ言った。ノーヒット・ノーランで御殿山に勝利した。(「魂を投げろ」飛田, 1986c : pp.405-416)

「一個の球に精根を傾けつくし、練習場の土の上に血へどを吐いて初めて会得される魂の入った神技こそ最も尊く、彼はそこに終生の宝とすべき人格を造り上げることができるのである。これは私がデッチ上げた一球入魂の説ではない。日本の武士道野球を創造した一高の先人が、…の練習の中に如実に示したそのままを穂洲が代弁するにすぎないのだ。」(『野球道』飛田, 1986c : pp.177-178)

「野球は単なる遊びごとであってはならない。野球から一つの人生をつかむ。そこに一球洗心とか一打入魂とかいう言葉が生まれる…。野球を単なる勝負事のように考える前に、心を洗う修練こそ高校野球の本質であろう。」(「魂の野球を想う」飛田, 1986c : p.341)

前述の飛田の年譜で記したように、1986年から、各回の春の茨城県大会優勝校には、「一球入魂 快打洗心」という飛田の揮毫の盾が贈られている。飛田は、文筆活動によって、一球入魂という言葉 را 定着させていった。球児たちは、野球の実践において自らの「一球入魂」の物語を生き、また、彼らの野球を見る者たちは、そこに「一球入魂」の物語を見ることになる。

3. 9. 堂々たる勝利(敬遠について)

冒頭の「はじめに」で記した松井選手5連続フォアボールに関して、もし飛田穂洲が生きていたなら、どのようなコメントをしたらだろうか。

飛田は、勝利こそが試合の究極的な眼目であり、選手は勝たなくてはならないことを前提しているから、命をかけて練習するのだと考えている。このような武士道的勝利至上主義にたちながらも、一方で以下のように述べている。「あくまで勝たんと気組みを尊重するわれらも、手段を選ばぬ陋劣を排除するのは正道の野球を護らんがためであって、一時の空名に幻惑され、あえてその魂を汚してまで勝たんとするがごときは、中等野球の冒涇これよりはなはだしきはない。」(『野球清談』飛田, 1986c : p.46) 「試合に勝つことの目標はもちろん大切だがこれに囚われすぎてはならない。勝つために手段を選ばないような行き方をすれば、われから天与の純真さから離れてしまうし、すぐにスポーツの邪道害毒を身につけることになる。甲子園の大会ももちろんだが、地方予選や練習試合にあってもこの心掛けをわすれてはならない。」(「甲子園球児に与う」飛田, 1986c : p.302)

このように、飛田は勝つためには手段を選ばないという考え方を否定している。しかし、戦略の一つとして、四球戦法があることを、彼が書いた野球教本には記されている。「無為の四球走者は決して投手の名誉ではないが、しかし試合の状況によっては故意に四球を与えて打

者を送る戦法のあることを忘れてはならない。」(『野球読本』飛田, 1986d: p.80)

3. 10. アマチュア主義

前述したように、質素剛健や修養主義の立場から、飛田はアマチュア主義を強く支持した。「スポーツの本質論において最も厳正に批判されねばならぬものは、物質的關係を持たぬという点にあらう。…時の流れに乗って生まれてきた興行野球ならそれもやむを得ないことであるが、これらの台頭を機会にアマチュア野球、ことに学生野球の立場を明確にしておく必要があり、興行野球が盛んになればなるほど、これから発散するところの悪影響を厳戒せねばならない。」(『野球清談』飛田, 1986c: pp.25-26)

「われらの試合によって入場料が集められるのだという痴人の夢から醒めねば、彼らの野球は墮落するよりほかに道がない。われらの力によって莫大の収入があるのであるから、学費も出せ、ご馳走もせよという賤劣な学生選手はまずないであろうが、もしありとしたらこうした腐敗した人間は日本の学生野球には不要である。」(『野球・人・漫筆』飛田, 1986e: pp.250-251)

「…選手と野球部長や父兄などに是非要望して置きたい事は、大学野球部などよりの条件付き勧誘に対する観念についてである。…関西のある地方などでは、卒の野球を売物のごとく考え父兄は大学野球部よりの交渉を心待ちにし、…。条件付きで大学野球部に迎えられたい事は既に精神的野球から離れたことであって、野球児の本懐とすべきではない。」(『野球読本』飛田, 1986d: pp.30-31)

このように、飛田は野球が金銭的なことに関わることに否定的な立場をとっている。しかしながら、飛田が師と仰ぐ安部磯雄は、野球がプロ化に向かう過程にあって、入場料の徴収や西欧合理的な経済的イデオロギーの醸成という役割を担っていたということは特筆すべきであろう(菊, 1993: pp.104-122)。このことは、野球を見せることで金銭の授受がなされるというプロ化の胎動の中で、アマチュア主義が主張されているのであり、一見すると相矛盾する現象として捉えられるであろう。だが、むしろ野球にまつわる教育的・精神修養的な物語が強調されることによって、スムーズに西欧合理的な経済的イデオロギーの普及がバランス的に可能となったと解釈できるかもしれない⁽⁸⁾。

3. 11. 団体的精神

3. 11. 1. 補欠について

現在でも、甲子園の全国高校野球大会では、ベンチに入れない数多くの生徒たちが、背番号の無いユニフォームをつけて応援している姿を目にする。飛田は、補欠について以下のように述べている。「ここになお注意しておきたいことは古参の選手中不運にして試合に出場でき

ないものが、どの野球部にも五人や六人は必ずある。これらの選手はまったく下積みとして口さがない者からは、万年補欠とかベンチウォーマーとか言われている。万年補欠すこぶる結構であり、野球部のためには長年犠牲となりいわゆる縁の下の力持ちとなってチームの強力を助勢した隠れたる功労者であるのだから心から尊敬の意を表さなければならない。…試合を出場選手のための勝利と考えていると大きな間違いである。」(『野球道』飛田, 1986c: p.235)このように、飛田は補欠もチームの一員であり、勝利に貢献しているのだと述べ、協同心を説いている。

3. 11. 2. 応援・応援団・後援会について

飛田は応援する者と選手との関係について、以下のような喩えを用いて論じている。「前線があって銃後があり、銃後があって前線がある。代表選手は前線であり、背後の学生は銃後である。対校試合は国家戦争の縮図と見なしていっこうさしつかえない。選手の背後にある学生が、選手を愛護し、声援する。これの拡大されたものが、前線銃後の関係であり、そこに少しの疑問の起こるはずがない。」(『野球清談』飛田, 1986c: pp.120-121)

飛田は、選手が失敗、チームが敗戦したとしても、応援団は、選手に対して敬意を表さなくてはならないと考えている。「この点(選手への敬意)が日本の運動界には徹底していない。…眼前の勝敗にのみ幻惑され敗者を責め勝者を謳う現実讃美がはなはだしい。…校友学生も野球部先輩もあまりに勝敗に執着し、その試合に備うることを思わず、戦後の喜憂に心を奪われすぎる。これがため早慶戦は二十年の中絶がなされたとも思える。」(『野球・人・漫筆』飛田, 1986e: p.219)

また、後援会についても、以下のように述べ、それはあくまでチームをサポートする役割に徹するべきであるとしている。「後援会があるいは勢力争いをなし、試合や勝敗のことにまで容喙するに至っては沙汰の限りといわねばならない。すべて教育の一部であることに意を用い互いに相戒めて選手に接し、勝ちたるがためにこれを愛重し、敗れたるがために非難するがごときがあってはいけない。」(『野球読本』飛田, 1986d: p.29)

4. メディアとしての物語

ー 出来事と物語の循環

前節では、飛田が書いた新聞記事や著作から、彼の野球信念を概説した。飛田の年譜で示したように、彼の野球についての論説は、40年余にわたり、印刷メディアによって人々に提供された。この節では、印刷媒体の特徴を明らかにすることによって、飛田の記した野球の言説が、実際のスポーツ事象とどのような関係にあるのかを検討する。

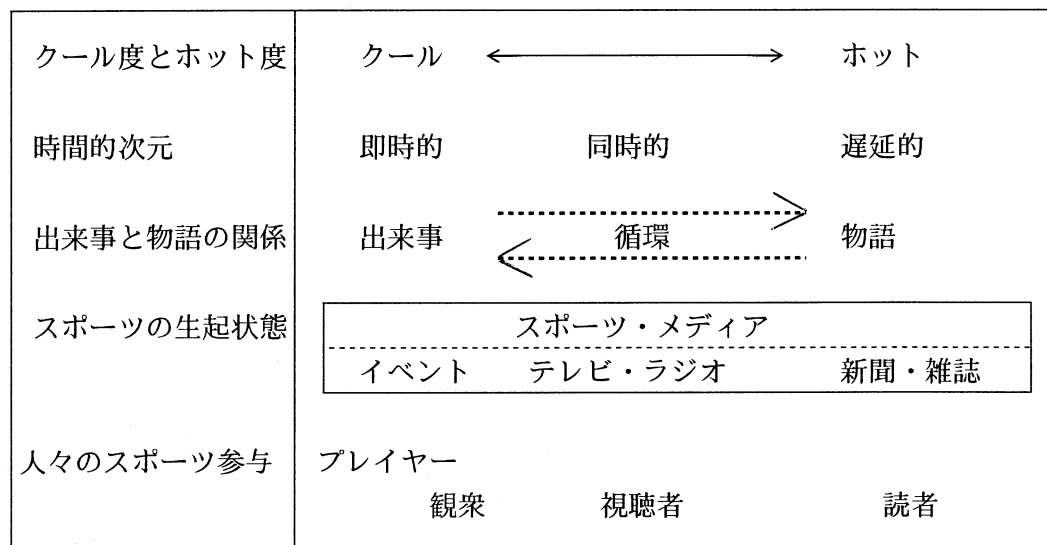


図1 スポーツ・メディアの相対的〈クール性・ホット性〉

マクラーハン⁹⁾は、メディアを「熱いメディア」と「冷たいメディア」に大別した (McLuhan, 1964: pp.23-34)。その類型のために、①情報精細度の高低、②単一感覚か全身感覚か、③補完度の高低=参加度の高低、という3つの基準が示されている⁹⁾。ホットな(熱い)メディアとは、単一の感覚を「高精細度」(high definition)で拡散するメディアのことである。データが十分に与えられているので、メッセージを受け取る受け手の側で補完する部分が少なく、参加度が低い。逆に、クールな(冷たい)メディアは、情報の精細度が低いので、メッセージの受け手が補完する部分が多い。そのため、受け手の参加度は高くなる。たとえば、電話やテレビはクールなメディアであり、アルファベット活字や書物はホットなメディアとなる。(小川, 1988: pp.3-18)(浜, 1996: pp.97-98)

ビレルとロイは、この2分法をメディア・スポーツに適用した (Birrell and Loy, 1981: pp.229-303)。イベントの観戦が最もクールなメディアであり、スペクテーターの感覚的参与を最も必要とする。テレビはそれより少しホットで、ラジオはさらにホット、新聞は最もホットなメディアであると規定してゐる。

亀山(亀山, 1990: pp.19-25)は、プロ野球において感動を生み出すようなプレイを「出来事」と呼び、球場における「出来事」の現実がメディアとして部分的に切り取られ、強調されることにより、「物語」となることを指摘している。物語(narrative)とは、人間の行動をストーリーとプロット(事実と事実との相互の関連性を説明するもの)とをもつ様式で叙述したものである。また、亀山は多くの物語を介することによって私たちがプロ野球を見る感受性は特定のボタンをもつものとして形成されており、「出来事」と「物語」は互いに循環する関係

となっていると指摘する。この出来事と物語との関係を、前述のメディア・スポーツのホットとクールの尺度に照らし合わせるならば、図1¹⁰⁾に示すように、出来事はクールなメディアであり、物語はホットなメディアに相当する。この図式にしたがえば、飛田が新聞などの印刷メディアに著したメッセージは細精度が高い、一義的な情報として位置づけられる。

飛田自身、一高の武士道野球という物語に影響を受け、中学、大学時代に選手として、そして早稲田大学野球部監督として、「出来事」としての野球を目の当たりにし、それを生きてきた。さらに、新聞記者としてバックネット裏から、「出来事」としての野球を見続けた。こうしたクールなメディアに接しつつ、その一方で、彼は、意気と熱が称揚される「魂の野球」(作田, 1967: p.260)の物語を、印刷メディアに載せていたのだった。つまり、飛田は、学生野球に関するホットなメディアの送り手でもあったのだ。このように、飛田自身も、この「出来事と物語の循環」の中にあっただと言えるだろう。

5. おわりに

本研究では、野球にまつわる物語の生成に関する研究の一環として、飛田穂洲の人物像や彼の野球信念を、彼の著作等から検討した。その結果、そこには、仇討ち主義、質素剛健、蛮カラ、無私道、精神修養主義、武士道的鍛錬主義、宗教的信仰としての野球道、アマチュア主義、共同体的精神などを見いだすことができた。

スポーツ・メディアをクール性とホット性の尺度で相対化した場合、こうした飛田の物語は主に新聞などの印刷媒体によって流布したものであり、ホットなメディアに位置づけられる。そして、あるものは今でも人々の心

の中に沈殿している。例えば、1999年の流行語大賞の一つに、西武ライオンズに入団した松坂大輔選手のリベンジという言葉がある⁽¹¹⁾。これは、強気で負けず嫌いの彼が、敗戦後のゲームの後に言った言葉だとされている。飛田の仇討ち主義に通ずるものかもしれない。また、筆者の担当するスポーツ社会学の授業で、昨年（2001年）度、飛田の野球信念を紹介したところ、高校時代に甲子園出場経験のある学生は、授業の感想カードに「高校の時に監督に言われた言葉『人並みの練習では人並みになれない、人の倍こそ人並みである。人に勝つには三倍の努力が必要』という言葉が、今の私の中に強く残っている。練習をして、無の境地に立った時に体が自然に動く、反応する。どんなに追い込まれても、自分はこれだけの事をしたのだから必ずやり通せるという平常心を保てるのが勝敗を左右すると考えている。」と書いた。これは、飛田の言う常善練習や地力主義の野球信念に相当するものであろう。

もちろん、ここで示した飛田の野球信念全てが、今なお学生野球のイデオロギーとして存在しているとは言えない。だが、こうした野球にまつわる物語は、例えば、この論考のはじめに紹介したアニメ「タッチ」のようなホットなメディアとして人々に受容され、そこから得られた定式が人々の中に沈殿する。そして、人々は、球場における「出来事」としての眼前のプレイを、この定式に基づいて見、その結果、物語が強化・再生産されるのである。あるいは、ときには、眼前の「出来事」と既存の「物語」のズレ⁽¹²⁾のため、その物語が組み替えられることもあるだろう。このようにして、スポーツ・メディアにおける「出来事」と「物語」の循環作用によって、スポーツのナラティブは再生産されるのである。ただし、本稿では、物語の変換にまでは言及することができず、あくまでも、飛田の言説に、学生野球の物語生成の源流を求めたに留まっている。したがって、今後スポーツの物語の再生産を論じるためには、現実のプレーである「出来事」との関係において、如何に「物語」が変容するのかを明らかにすることが課題となるであろう。

注

- (1) 朝日新聞、朝刊、1992年8月18日、社会面、13版、p.25。毎日新聞、朝刊、1992年8月18日、社会面、13版、p.29。
- (2) この映画は、1987年に製作され、原作はあだち充である。なお、同様の場面は、あだち充『タッチ』小学館の第10巻（1993年発行）、と第11巻（1994年発行）に掲載されている。
- (3) 朝日新聞、1986年7月「学生野球の父飛田穂洲生誕100年記念特集号」水戸支局
- (4) ここでは、主に『飛田穂洲選集1～5・別巻』（ベースボールマガジン社、1986年）を用いた。なお、この選集の内容は以下の通りである。
 - a. 『第一巻 野球生活の思い出』－ 幼年時代、水戸中学

- ・早稲田大学の野球部時代の回顧録
「人生のスタート」雑誌ベースボール・マガジン昭和31年11月号～32年1月号連載〈pp.9-34〉
『野球生活の思い出』朝日新聞社、昭和2年〈pp.35-421〉
 - b. 『第二巻 熱球三十年』－ 早稲田大学野球部監督時代（6年間：大正8年暮れ～14年11月）の回顧録
『熱球三十年』中央公論社、昭和9年
 - c. 『第三巻 野球記者時代』－ 主に戦中から戦後にかけて書かれたもの
『野球清談』東海出版社、昭和15年 〈pp.11-168〉
『野球道』話者、昭和23年 〈pp.169-248〉
『野球への情熱』雑誌ベースボール・マガジン
昭和31年10月号～32年9月号 〈pp.249-299〉
「甲子園球児に与う」雑誌ベースボール・マガジン
昭和32年8月号 〈pp.300-308〉
「学生野球にシーズン・オフはない」ベースボール・マガジン
昭和33年9月号 〈pp.309-318〉
「魂の野球を想う」新聞切抜帳より選択採録〈pp.319-360〉
「野球戦評」アサヒ・スポーツ、朝日新聞より選択採録
〈pp.361-402〉
「野球ロマンス」『ベースボール・外野及び練習編』
実業之日本社、昭和3年の付録より採録 〈pp.403-429〉
 - d. 『第四巻 野球読本』
『中等野球読本』スポーツ良書刊行会、昭和10年
 - e. 『第五巻 随筆と追想』
『野球人国記』誠文堂、昭和6年 〈pp.9-136〉
『野球・人・漫筆』人文書房、昭和6年 〈pp.137-283〉
「獵犬と野球選手」朝日新聞、昭和31年1月26日
〈pp.287-289〉
「神宮の英雄・宮武三郎と石井連蔵」文芸春秋臨時増刊、
昭和30年6月5日 〈pp.290-300〉
「眼」文芸春秋、昭和33年5月号 〈pp.301-304〉
「穂洲漫筆」アサヒスポーツ、昭和15・16年連載
〈pp.305-330〉
「進め！野球の大道へ！」ベースボール・マガジン創刊号、
昭和21年4月 〈pp.331-335〉
「追憶 ひろ子の霊にささぐ」昭和34年 〈pp.336-425〉
 - f. 『別巻 回想の飛田穂洲先生』－ 関係者40人による回想録
- (5) ここでは、前掲(3)の資料と上掲(4)の選集に基づいて、飛田穂洲の年譜を作成した。
- (6) 前掲(3)のp.3。
- (7) 「アメリカのベースボール・プレイヤーは身体が疲れているうにトレーニングを続けるのは、悪い癖を身につけるだけだと考えている。が、日本の野球選手は、『千本ノックを受けて身体がつかれてふらふらになり、とっさにグラブを差し出すようなときに、自然な身体の動きが生まれる』(川上哲治)と考えている。あるいは、身体を痛めつけることが、精神を鍛えることにつながるという考え方をしている。」(玉木、1991：p.123)
- (8) ケリーは、飛田の厳格なアマチュアリズムが商業化の動きを抑制したと述べているが(kelly, 1998：p.105)、むしろ、学生野球の崇高さを堅持することによって、学生野球の発展が正当化され、商業的展開につながったと理解できないだろうか。飛田は、安部磯雄は米国大学野球を招聘した時には一流ホテルで歓迎会を開いたが、部員の飲み食いでの費用を使ったことがないということに言及し、「(安部)先生は入場料徴収論者としての主唱者であるが、そのかわり入場料の使途についてはすこぶる潔癖であった。(飛田、

- 1986c:pp.33-35)」と述べていることから、入場料の徴収に反対している訳ではないことが分かる。
- (9) 3つの基準を曖昧なままに、素朴に結合しているのだからににくいという指摘もされている。(吉見, 1994:pp.44-45)
- (10) [Birrell and Loy, 1981: p.300]に掲載されている fig. 2 に著者が加筆したもの。渡部は、スポーツそのもの(=プレー)を「事件」と呼び、これを観客の意向に沿ってテレビやマスコミによって物語化されたものを「話題」と呼び、後者によってスポーツの退廃が引き起こされると批判している(朝日新聞夕刊, 1998年10月25日付け5頁3版)。
- (11) 自由国民社『現代用語の基礎知識』選による。
(<http://www.jiyu.co.jp/gendai/shingo/shingo.html>)
- (12) このズレに関しては、拙論(高橋, 2000)を参照。そこでは、メッセージの受け手の実生活と物語とのズレを問題にした。

文献

- Birrell, S. and Loy, J.W., 1981, "Media Sport: Hot and Cool", in Loy, J.W., Kenyon, G. S. and McPherson, B. D. (eds.) *Sport, Culture and Society: a Reader on the Sociology of Sport*, Lea&Febiger, pp.296-313. (ビレル・ロイ, 1988, 「メディア・スポーツホットとクール」, ロイ・ケニヨン・マックファーソン編, 糸野豊編訳『スポーツと文化・社会』ベースボールマガジン社, 456-475.)
- Mcluhan, M., 1964, *Understanding Media: The Extensions of Man*, McGraw-Hill Book Company. (栗原裕・河本伸聖訳, 1987, 『メディア論－人間拡張の諸相』みすず書房)
- 浜日出夫, 1996, 「マクルーハンとグルード」, 井上俊他編『岩波講座 現代社会学第22巻 メディアと情報化の社会学』, 岩波書店, pp.97-112.
- 樋口聡, 1987, 『スポーツの美学』不昧堂.
- 亀山佳明, 1990, 「スタジアムの詩学－プロ野球を中心として」, 亀山佳明編『スポーツの社会学』, 世界思想社, pp.3-27.
- Kelly, William W., 1998, "Blood and Guts in Japanese Professional Baseball", in Linhart, S. and Fruhstuck, S. (eds), *The Culture of Japan as Seen through the Leisure*, State University of New York Press, 95-111.
- 菊幸一, 1993, 『近代プロ・スポーツの歴史社会学』不昧堂出版.
- 日下裕弘, 1985, 「明治期における『武士』的, 『武士道』的野球信条に関する文化社会学的研究」*体育・スポーツ社会学研究*, 4: pp.23-44.
- 小川博司, 1988, 『音楽する社会』, 勁草書房.
- 高橋豪仁, 1989, 「現代スポーツの宗教性に関する研究」*体育・スポーツ社会学研究*, 8: pp.67-88.
- 高橋豪仁, 2000, 「新聞における阪神淡路大震災に関連づけられてたオリックス・ブルーウェーブ優勝の物語とあるオリックス・ファンの個人的体験」*スポーツ社会学研究*, 8: pp.60-72.
- 玉木正之, ロバート・ホワイティング, 1991, 『ベースボールと野球道』講談社(新書).
- 飛田穂洲, 1986a, 『飛田穂洲全集 第一巻』ベースボール・マガジン社.
- 飛田穂洲, 1986b, 『飛田穂洲全集 第二巻』ベースボール・マガジン社.
- 飛田穂洲, 1986c, 『飛田穂洲全集 第三巻』ベースボール・マガジン社.
- 飛田穂洲, 1986d, 『飛田穂洲全集 第四巻』ベースボール・マガジン社.
- 飛田穂洲, 1986e, 『飛田穂洲全集 第五巻』ベースボール・マガジン社.
- 飛田穂洲, 1986f, 『飛田穂洲全集 別巻』ベースボール・マガジン社.
- 作田啓一, 1967, 『恥の文化再考』筑摩書房.
- 清水論, 1998, 『甲子園野球のアルケオロジー』新評論.
- 吉見俊哉, 1994, 『メディア時代の文化社会学』, 新曜社.